

問いコンペ 2023 結果報告

問いコンペとは、「問い」を立てあうことを目的とした新企画で、

<総合知育成コンクール"H2O"2023>において実施しました。

その趣旨と結果を以下の順に報告します。

<[募集内容](#) / [作品一覧](#) / [意見交換の記録](#) / [受賞作](#)>

(↑クリックで各項目にジャンプできます)

*

【募集内容】 [→項目一覧にもどる](#)

総合知育成コンクール"H2O"の一部門として、機構内の学生・院生・教職員から「問い」を以下のように募集し、2024年1月11日に実施しました。

<<応募要領>>

【どんな問い?】 総合知の創造を触発するような"問いかけ"を考えて送ってください。ジャンルは不問です。その問いを解くには、異なる分野／領域を繋ぎ・融合させることが必要となりそうなものを歓迎します。

・問いのイメージ：@@@は発明できるか、人間はなぜ@@@なのか、@@@はなぜ##
##なのか、どうすれば###は実現するか、なぜ@@@は存在するのか、@@と**
の両立は可能か、などなど

・例：「人間はなぜ花が好きなのか」→問いの説明：心理面だけでは解けそうにない→人間のどこかに"蜜蜂性"や"蝶々要素"が埋め込まれている!?

・上記のような「問いの説明」は必須ではなく、あくまでも「問い」がメインの企画です。

【応募方法】 本フォームから、自前の「問い」と所属等を送信してください。複数の問いの列記も OK です。H2O イベント当日の会場での応募も可能ですが、整理の都合上、

できるだけ本フォームから開催前日 1/10 までにお願ひします。

【合評と表彰】 H2O イベント当日に参加者相互で「問い」を味わい、"総合知"を触発する上で魅力的なものを選出し、表彰対象（賞状と副賞授与）とします。表彰対象となった作品は、作成者が当日会場におられた場合はその場で表彰します。不在の場合は、無記名のまま両学内にアナウンスし、作者からの連絡をお待ちします。

【備考】

- ・1/11 のイベントに参加できない人も応募できます。
- ・受賞作は後日、奈良国立大学機構等の HP で公表します。また、応募された"問い"は、イベント終了後に、奈良国立大学機構連携教育開発センターからの諸発信などで使用したり、実際の「課題」として活用をするなどの可能性がありますので、了承のうえ応募してください。発信の際に記名をご希望の方は、確認キー欄にお名前をお書きください。

【さまざまな「問い」～応募された作品一覧～】 [→項目一覧にもどる](#)

A：「なぜ能の無い人ほど仕切りたがって声の大きいのか」

B：「なぜ他の人がやっていることは楽しそうに見えるのか」

C：「なぜ日本人は流行を意識するのか」

D：「ありえなそうな自然言語（コンピューター言語等ではない普通の言語）とはどのようなものか」

E：「今、推し活が流行している。推しのゆかりの地を巡礼したり、ものを買ったり、、、
どうしたら、推しをつくれますか？ また、「推し活」の流行は何をあらわしているか？」

F：「東洋と西洋の中心はどこか」

G：「あなたがモヤモヤしていること、解決したいことは何ですか？」

H：「人間が人工知能（AI）よりも優れている点とは？」

I：「本当の幸せとは？」

J：「感動に理屈はあるか？」

K：「重力を制御（範囲、強さ、方向など）できたら社会はどう変わるか。」

【意見交換の記録】

[→項目一覧にもどる](#)

※順不同で意見交換を行った。討論対象にできなかったものへのコメントは[運営より]と付記した)

A：「なぜ能の無い人ほど仕切りたがって声の大きいのか」

一同から微苦笑がこぼれた問いだった。同様の場面に遭遇した経験がある参加者もいたようで、心理面・動物行動学的側面・社会的側面など多くの切り口で考察する討論が展開された。なにかにコンプレックスがあったり、自分の意見が正しいと思いこんでいる場合ではないかという意見がでた一方で、そもそも「能が無い」とはどういうことなのかについても話題が広がった。つまり、人間には「考えてからやる」タイプと、「やってから考える」タイプがあるが、後者のタイプの人物が「能が無い」とみなされがちなかだけであって本当に能が無いかどうかの判断は難しいのではないか、というような意見がある。人間の行動特性に対して様々な見方があるのだなという気づきを促す問いであった。

B：「なぜ他の人がやっていることは楽しそうに見えるのか」

「隣の芝は青い」の行動版とも言える問い。参加者全員がその通りだと納得していたのではないだろうか。それにしても、相手が自分の行動をそう思っていると考えているなら、いま自分がやっていることもそんなに捨てたものではないかもしれない。[運営より]

C：「なぜ日本人は流行を意識するのか」

討論の中で「流行を意識するのは日本人だけではないだろう」「なぜ日本人に限定するのか」との声も上がり、そこから、「日本人ならではの流行意識とは？」という問いにしてはどうかという意見に発展した。「大衆の間での流行もあるが、マイブームというものもある。」や「共有したいという欲求は人間ならではの意識であり、悪いことではない。」など流行を作り出す人間・人間社会そのものの特性や感情を考察する討論が展開された。さらに、昔の結婚のあり方と現在とを比較して「昔は結婚するのが当たり前で、今の若い人たちは根性がない。経済的には昔の方が大変だった。」という自らの祖母の語りを紹介する参加者もいるなど、討論は談論風発的に広がった。

D：「ありえなそうな自然言語（コンピューター言語等ではない普通の言語）とはどのようなものか」

この問いに対しては特に意見が出なかった。限られた討論時間内で問いの含意を理解し意見交換するには、少し高度な問いであった感がある。「世界の言語を見ると、その多様性におどろかされるが、いくらなんでもありえなそうな自然言語とはどのようなものだろうか。人間という種が持つ能力による制約や、言語が言語たりうるための条件から考えると？」というのが応募者が付記してくれた説明だった。言語の領域を事例として、人間の能力の可能性や限界について、想像や妄想を膨らませながら具体的に考えうる魅力的な問いである。「ありえそうな」ではなく、「ありえなさそうな」という否定形の問いである点も興味深い。この問題をSF的に展開した例として、筒井康隆の『関節話法』が思い起こされる。（運営より）

E：「今、推し活が流行している。推しのゆかりの地を巡礼したり、ものを買ったり、、、。どうしたら、推しをつくれますか？ また、「推し活」の流行は何をあらわしているか？」
「推し」があることが当然とされるような昨今の風潮に対して、控え目ながら違和感を表

明する問いといえるだろう。さらに末尾は、そのような風潮を生み出している大きな「何か」への問いかけとなっている。「推し」たり応援することを重視する社会や現代人の謎に迫っている点が、この「問い」の魅力であるといえるだろう。〔運営より〕

F：「東洋と西洋の中心はどこか」

O r i e n t（東洋）、O c c i d e n t（西洋）の語源にもヒントがあるのではないかとこの発言から始まり、宗教学的な差異であったり、伝統文化を理解する心の持ち方の差などの意見が出た。西洋人の中に茶道家がいるなどの事例から、そもそも東西をわけることの難しさにも話題が広がるなど、なかなか答えを導き出せない難解な問いであった。さらに、人間の発育段階における環境の違いにより大脳の自然現象に対する反応が異なりうるのではという見解など、多方面からの討論が展開された。自らを「西洋」「東洋」と呼ぶことは、そうみなす相手の立場にたつての自己規定であり、最初から他者性を含んだ不思議な概念セットであることに気づかされる問いである。

G：「あなたがモヤモヤしていること、解決したいことは何ですか？」

これは大きな問いである。輪郭がはっきりした事柄だけでなく、「なんか気持ち悪い…」といった不定形な違和感までもが、モヤモヤという表現ですくい取られているあたりがこの問いの魅力だろう。心理面での悩みがつい思い浮かぶが、社会的な問題や工学的な課題なども含めて考えると、問いの射程が一気に広がる（運営より）

H：「人間が人工知能（AI）よりも優れている点とは？」

「人間とはなにか」「人間ならではのものとはなにか」というのは古くからのテーマであるが、AIを鏡とすれば、このテーマに改めてアタックできるということも教えてくれる問いである。なお、問いのフレーズに含まれている「優れている点」という言葉に

も注目したい。明らかにポジティブな資質だけでなく、たとえば、「泣くことができる」といった特性を有することも人間の「優れている点」であるのかなのか……。そういったディスカッションへとつながる点もこの問いの魅力であろう。[運営より]

I：「本当の幸せとは？」

人類永遠の問いではないだろうか。にもかからわず、このテーマについて正面から問いかげ、ディスカッションしあう機会は意外に少ないように思われる。答えはもちろんひとつではない。だからこそ時間をかけて、なぜそう思うのかもふくめた各人の「幸せ像」をじっくりと語り合いたいものである。[運営より]

J：「感動に理屈はあるか？」

感動は沸き起こってくるものである。「いまから感動しよう」と決めて呼び起こすことはできない。そういう意味ではコントロール不能なものにかであり、理屈抜き現象である。しかしその一方で、“なぜいかにして感動が生じるのか”を学術的に解明することはできるのかもしれない。やや焦点がずれるかもしれないが、“そもそも「理屈」とはなにか”という別のテーマにもこの問いは繋がっているのだ。[運営より]

K：「重力を制御（範囲、強さ、方向など）できたら社会はどう変わるか。」

SFのようではあるが、物流だけでなく物性物理や材料科学、宇宙開発など広い範囲での変革が生じると考えられる。すでに実用化しているドローン技術やその普及が、脱重力社会のあり方を垣間見せてくれているともいえるだろう。ほかにもさまざまな利便性が向上することになるかもしれないが、その一方で、「制御」するために必要なエネルギーがどれほどの量になるのかによって、資源の持続可能性等の問題の議論も喚起されることもありうる。[運営より]

【受賞作】 [→項目一覧にもどる](#)

開催当日の参加者による投票の結果、下記となりました。

問いコンペ賞（2023年度）

A：「なぜ能の無い人ほど仕切りたがって声大きいのか」

※

次点は<J：「感動に理屈はあるのか？」>でした。

本コンペは匿名で実施しました。上記の受賞作 A を応募してくださった方は、下記メールアドレス（連携教育開発センター宛）までご連絡ください。

kyoyo-kyoiku@ml.nara-ni.ac.jp

その際、応募時に添えていただいたキーワードも付記してください。

以上

2024. 1